

明治期における法華經の版本

——日蓮宗大教院版について——

寺 尾 英 智

はじめに

法華經は古来幾たびも単独の版經として刊行されてきた。中世における春日版、近世における瑞光寺版などは、その中でも重要な版經である。しかし、これらの版經には、訓点が付されてはいない。訓点が付された版經としては、心空版を嚆矢とし、近世における頂妙寺版などがある。¹この訓点付き版經の系譜に連なり、明治時代に刊行されたものに日蓮宗大教院版がある。

明治の日蓮宗を主導した新居日薩は、多方面で活躍すると共に法要儀軌の整備も計り、法華經訓読の普及にも努めた。そして、訓読の読み方・節奏の統一を計り、音声清朗・文句分명한読みを流布する目的で、明治十三年九月日蓮宗大教院から法華經を刊行した。この日蓮宗大教院版法華經（以下、大教院版法華經という）は、江戸時代の檀林に取って代わった大教院・中教院の勤行で読誦され、優

陀那院日輝にはじまる充治園の伝統である緩やかな読誦は、現在にまで至っていると評価されている。²このように、大教院版法華經は日蓮宗の読經・法要儀礼を考える上でも重要な位置を占めることが指摘されているが、従来研究の俎上に載せられることはほとんどなかった。それは、大教院版法華經が、日常の読經において今以て実用されている經本であることもあろう。

そこで本稿では、大教院版法華經の基礎的な研究として、版本について紹介したい。³大教院版法華經の版本は、売り捌き所として実際に經本の刷り立て販売を行った須原屋に保管されていたが、昭和十九年二月、関係者の尽力によって小湊誕生寺に納められていた。⁴そのため、戦災による焼失を免れることができたのである。以下では、まず版本の概要について明らかにし、次いで刷り本との関係について検討することにした。

一 版本の概要

誕生寺に所蔵される法華經の版本は、合計一三〇枚に及ぶ。これらの版本をみると、法量によって大きく三種類に分類することができる。版本に刻まれた本文についても、一三〇枚で完結するのではなく、版本の法量に対応して三種類あることが明らかとなった。そこで、三種類の版本について、版本枚数の多寡によって甲本・乙本・丙本とし、それぞれの概略を示すことにする。

1 法華經版本甲本

甲本の版本は、合計七一枚である。版本は両面彫りとなっていることから、一枚で二面の版面がある。一面あたりの本文は、三〇行である。三〇行の本文には五行毎に余白が取られていることから、五行が折本の一折となり、一面で六折分となる。したがって、版本一枚で一・二折六〇行の本文を刷ることができる。

各版本には、取っ手の部分に版面の順序が記されており、これによって各巻別に版本の枚数を整理すると次の通りである。

卷一	九枚	卷二	一〇枚	卷三	一〇枚	卷四	九枚
卷五	九枚	卷六	九枚	卷七	八枚	卷八	七枚

版本の法量は、七一枚共にほぼ同一であるので、巻一の九枚目を示すと、縦二一・二センチ、横七五・七センチ、厚二・二センチで

ある（取っ手部分を含まず）。本文の一行当たりの字高は一七・一センチ、五行当たりの字幅は七・四センチを計る。本文は罫線で囲まれたりしてはいない、いわゆる無界である。全巻に亘って返り点、送り仮名、読点が付されている。巻一から巻八に至る本文は、整足している。

各巻の版本の中には、法華經の本文以外の文面が刻されているものがある。巻一の版本は本文が第一七面（九枚目表）で終了し、第一八面（九枚目裏）は刊行の年次・蔵版者等を示す刊記となっている。刊記は三折分に亘り、各折とも子持野によって囲まれている。

この内、三折目の文字部分は、全体が埋木されて彫り直されている。刊記は次の通りである（写真1）。

（一折）

明治十三年五月廿二日御届
同年九月刻成

日蓮宗大教院蔵版

芝区二本榎町十八番地

（二折）

改正訓点人 大教正新居日薩
群馬県平民
右同所承教寺寄留

費 刻
同県下前橋紺屋町
岩崎作太郎

（三折）

大教院出版
書籍売捌所

須原屋 鈴木莊太郎
東京市京橋区南伝馬町三丁目五番地

卷三の版本は本文が第一九面（一〇枚目表）の四折分で終了し、



写真1

第一九面の後半部分及び第二〇面（一〇枚目裏）は題箋となっている。何れの題箋も、題字を子持野によって囲んでいる。なお、各題箋の上部には、私に通し番号を付した。

（第一九面）

- 1 妙法蓮華經乾卷改正訓点
- 2 妙法蓮華經坤卷改正訓点

（第二〇面）

- 3 妙法蓮華經卷第一改正訓点
- 4 妙法蓮華經卷第二改正訓点
- 5 妙法蓮華經卷第三改正訓点
- 6 妙法蓮華經卷第四改正訓点
- 7 妙法蓮華經卷第五改正訓点
- 8 妙法蓮華經卷第六改正訓点
- 9 妙法蓮華經卷第七改正訓点
- 10 妙法蓮華經卷第八改正訓点
- 11 明治十三年九月刻成

改正
訓点 妙法蓮華經

日蓮宗大教院蔵版

卷四の版木は本文が第一七面（九枚目表）の二折分で終了し、後半部分は卷三の版木の第一九面・第二〇面とは異なる題箋となっている。なお、題字は何れも子持野によって囲まれており、卷三の題

箋と同形式である。

（その一）

- 12 妙法蓮華經改正訓点元
- 13 妙法蓮華經改正訓点享
- 14 妙法蓮華經改正訓点利
- 15 妙法蓮華經改正訓点貞

（その二）

- 16 妙法蓮華經改正訓点全
- 17 妙法蓮華經改正訓点全

卷四の版木の第一八面（九枚目裏）は、三折分に亘り跋文となっている。跋文は次の通りであるが、本文と同様に無界である。文章には、全体に亘って返り点及び送り仮名が付されている（返り点及び送り仮名は省略した）。

（一折） 跋

妙經刻本。其類甚多。特以艸山印本為最正。然是皆真読本。至若訓読本実鮮矣。或有一二施傍点者。亦繁冗失宜。未足称善本蓋古来読誦。専主真読。而為訓読甚希。是所以世無善本也。今也世右文学。人由訓読資義解焉。可以為適時宜者矣。先「師日輝和尚。夙有見于此。首倡用訓読。而宗徒漸風靡。始憾無善本。今茲偶丁宗祖六百遠忌之前

一年。余欲刻一本以報涓埃。謀之親族岩崎氏。欣喜応之。捐幾多金。余乃參校諸本。折衷刪補。以付剞劂。雖不敢称善本。或因此得訓読行於世。而開興学之一端。則不唯可以為応時報恩。亦可以謂「

（三折） 繼先師之遺志也歟

明治十三年庚辰九月一日謹書東京大教院双

榎書樓

身延嗣法沙門文嘉日薩（印）（印）

甲本の版木には、本文に加えて跋および刊記、さらに題箋があり、刷り出すための版木はほぼ整足しているものと考えられる。

2 法華經版本乙本

乙本の版木は、合計四五枚である。版木は両面彫りとなっていることから、一枚で二面の版面がある。一面あたりの本文は、四五行である。四五行の本文には五行毎に余白が取られていることから、五行が折本の一折となり、一面で九折となる。したがって、版木一枚で一八折九〇行の本文を刷ることができる。

版木の右上隅には、「一ノ巻」（一枚目表）、「一ノ式」（一枚目裏）という様に版木の順番を示す陰刻銘がある。この銘によって版木を整理すると、次のようになる。

- 「一」の版木 一三枚 「二」の版木 一二枚
- 「三」の版木 一〇枚 「四」の版木 一〇枚

法華經の本文は、四ノ二十が巻八の巻尾となっていて、八巻共に整足している。但し、本文は巻一から巻八へと順次刻されていて、版木における一ノ四の区分がそのまま法華經二巻ごとの分巻に対応しているわけではない。

版木の法量は、四五枚共にほぼ同一であるので、一の一枚目を示すと、縦一八・二センチ、横八七・九センチ、厚二・四センチである（取っ手部分を含まず）。本文の一行当たりの字高は二三・五センチ、五行当たりの字幅は六・七センチを計る。本文は罫線で囲まれたりしていない、いわゆる無界である。全巻に亘って返り点、送り仮名、読点が付されている。版木は本文のみであって、刊記や跋、題箋などは含まれていない。

3 法華經版木丙本

丙本の版木は、合計一四枚である。版木は両面彫りとなっていることから、一枚で二面の版面がある。一面あたりの本文は、三五行である。三五行の本文には五行毎に余白が取られていることから、五行が折本の一折となり、一面で七折となる。したがって、版木一枚で一四折七〇行の本文を刷ることが出来る。版木の右上隅には、「二」（一枚目表）から「二十八」（一四枚目裏）という様に版木の順番を示す陰刻銘がある。

版木の法量は、一四枚共にほぼ同一であるので、一枚目を示すと、縦一七・九センチ、横七〇・〇センチ、厚二・三センチである（取っ

手部分を含まず）。本文の一行当たりの字高は二三・七センチ、五行当たりの字幅は六・五センチを計る。本文は罫線で囲まれたりしていない、いわゆる無界である。全巻に亘って返り点、送り仮名、読点が付されている。

巻首は、法華經の本文に先立って目録となっている。目録は一折分で、四段の罫線によって仕切られており、外側を子持罫によって囲まれている。

序品	神力品	普賢品	小回向
方便品	属累品	此經難持	高祖回向
欲令衆	普門品	朝昏礼誦式	积尊回向
提婆品	陀羅尼品	十双歎	四信五品鈔
寿量品	嚴王品	誦經文	当体義鈔

巻末は、本文に続いて二折分が刊記となっている。

（一折） 明治十三年五月廿二日御届

同年 同 月 出 版

明治二十八年六月 再版

日蓮宗大檀林蔵版

芝区二本榎町十八番地」

（二折）

改正訓点人 新潟県平民
小林日董

右同所寄留

東京京橋区南伝馬町三丁目五番地
須原屋莊太郎

製本所

丙本は、目録部分によって明らかなように、法華経卷一から卷八に至る一部経ではなく、主要な部分を抜き出したいわゆる要品である。卷末には、日常の勤行などに用いる要文や回向文なども収録していることが、やはり目録部分からわかる。

以上に述べたように、大教院版法華経として誕生寺に伝わる版本には三種類のものであった。ところで、大教院版法華経は明治十三年に刊行され、八巻であるとも十巻、即ち開結二経を併せた三部経であるともされている。そこで次に、現存の版本と従来いわれるところの大教院版法華経との関係について検討することにする。

二 刷り本と版本

誕生寺に所蔵される版本の刷り本としては、現在まで甲本及び乙本に当たるものについて確認することが出来た。そこで丙本については今後の調査に待つこととし、甲本と乙本について、版本と刷り本を照合し問題点を明らかにしたい。

1 法華経版本甲本

甲本の版本による刷り本として確認したものに、身延山久遠寺身延文庫所蔵本がある。同本には、表紙見返に大正三年六月に奉納

する旨を記した刷写の銘文があり、それ以前の刷り本であることが明らかである。銘文に拠れば、本来は四十部が奉納されたようであるが、現状では卷第一から卷第八に至る零本二八冊が確認される(以下、身延文庫甲本)。完本であることが明瞭なものでは、東京都台東区妙音寺所蔵の八巻本がある(以下、妙音寺甲本)。同本にも、裏表紙見返に大正十四年三月六日付の納入に関する墨書銘があり、刷り本の年代が明らかな本である。

身延文庫甲本は、縦二四・四センチ、横八・五センチを計る折本である。表紙は薄茶色の紙表紙で、雲母による空押し模様がある。本文は一行一七字詰、一折五行である。字高は一七・一センチ、一折(五行)の字幅は七・五センチである。表紙中央に題箋が貼り付けられている。題箋は木版刷で「妙法蓮華経卷第●改正訓点」(●は「一」)「八」の巻数)とあり、表題を子持ち野で囲む。妙音寺所蔵本の体裁も同一である。両本共に卷第八の末尾は、本文に続いて新居日薩の跋(三折分)と刊記(三折分)が続くが、版本との文章の相違は見られない。なお、身延文庫甲本には、刊記一折目「日蓮宗大教院蔵版」の下に印文「大檀林蔵版章」の朱印、同じく三折目「鈴木莊太郎」の下に印文「書林須原屋鈴木□印」の紫印が捺されるが(写真2)、妙音寺甲本には見られない。

ところで、本書の跋と刊記については、薩和上遺稿事蹟編纂会編『新居日薩』に収録されている。このうち、跋は版本や刷り本と同

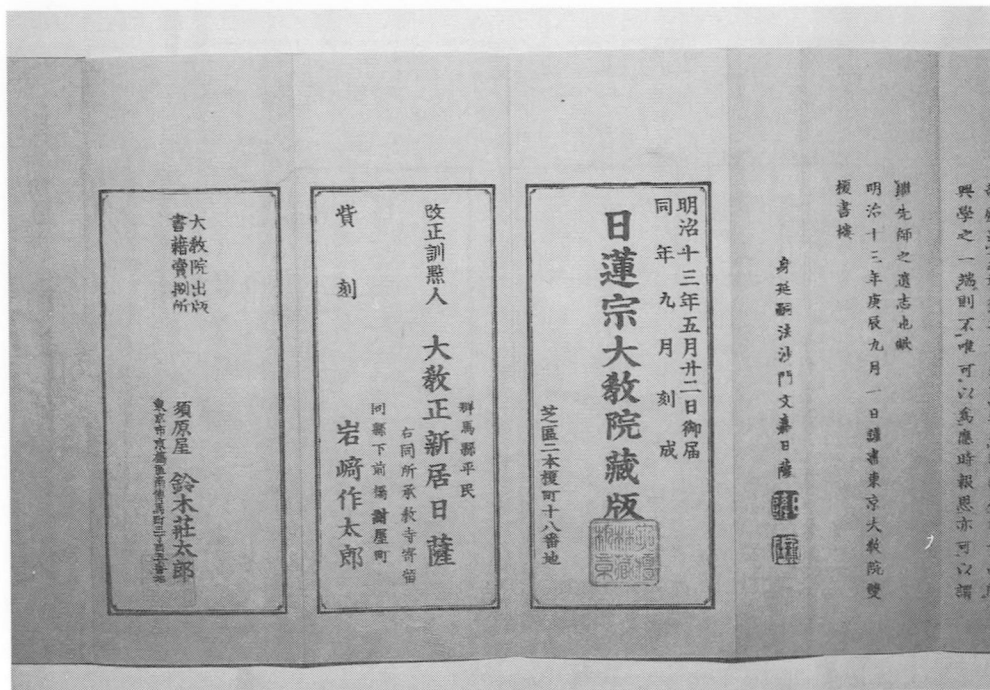


写真 2

様であるが、刊記については相違が見られる。二折目に相当する部分までは同文であるが、三折目に相当する部分について『新居日薩』では次のようにある。¹¹⁾

大教院出版図籍売捌所

北畠千鍾房 須原屋茂兵衛

日本橋区通一丁目十五番地

売り捌き所とは売り弘め所ともいい、蔵版主と提携して当該書籍の流通の要となる書肆をいう。¹²⁾ ここで掲げられる北畠千鍾房の須原屋茂兵衛とは、屋号や住所からみて江戸最大の書物問屋として名高い須原屋茂兵衛家であることが分かる。須原屋茂兵衛家は屋号を千鍾房と称し、日本橋通一丁目西側を住所とする。初代の須原屋茂兵衛は、北畠宗元といい、万治年間に江戸に出て書肆を開業したといわれる。江戸根生いの本屋として成長し、江戸後期には最大の本屋となった。暖簾分けによって多くの別家があった。八代目茂兵衛有親は万延元年（一八六〇）に没していたから、明治初期に活動していたのは九代目茂兵衛充親であると考えられる。¹³⁾

『新居日薩』収録の刊記によれば、現存版本とは別本が刊行されていたようにも見受けられる。そこで改めて版本を精査すると、相違が見られる三折目の文字部分は、全体が埋木されて彫り直されていることに注意される。恐らくは、売り捌き所の変更に伴う版本の訂正が行われたものと考えられる。

判例雖不致稱善本或因此得訓讀行於世而開
典學之一端則不唯可以爲應時報恩亦可以謂

羅先師之遺志也歟

明治十三年庚辰九月一日謹書東京大教院雙
楓書樓

身延嗣法沙門文嘉日薩



明治十三年五月廿二日御届
同年九月刻成

日蓮宗大教院藏版

芝區二本榎町十八番地

改正訓點人 大教正新居日薩

群馬縣平民

貴刻

右同所承教寺寄留
同縣下前橋紺屋町
岩崎作太郎

大教院出版
書籍賣捌所

北畠千鍾房

須原屋茂兵衛

日本橋區通壺丁目
十五番地

写真3

須原屋茂兵衛と須原屋鈴木莊太郎の關係については、昭和十九年八月十三日付「経版格護之由来」に次のように述べられている（句読点は筆者）。

大教院版として日蓮宗門唯一の経版である此本版は、明治初年東都仏書肆たる須原屋鈴木茂兵衛氏が大教院より発兌を命ぜられて頒布してゐた。茂兵衛氏歿後も、二代莊太郎氏が引続いて発刊し

大教院版法華経は須原屋茂兵衛が発刊を命じられ、その没後は二代目となった莊太郎が後を引き継いだという。この記述と版木の現状等を考え合わせると、『新居日薩』収録の刊記は明治十三年に版木が出来た当初のものであり、その後売り捌き所を現在のように改刻したと考えられる。

この明治十三年当初の刊記をもつ刷り本については、千曲市法輪寺所蔵本（以下、法輪寺甲本）、さらに筆者所蔵本（以下、筆者蔵甲本）を確認した。筆者蔵甲本の法量は、縦二四・二センチ、横八・五センチと縦がわずかに短い。また、題箋に紺紙が用いられている。刊記の三折目は、次の通りである。

北畠千鍾房

大教院出版
書籍売捌所

須原屋茂兵衛

日本橋區通壺丁目
十五番地

なお、法輪寺甲本及び筆者蔵甲本の刊記（写真3）には、一折目

「日蓮宗大教院蔵版」の下に、印文「大教院章」の朱印が押印されている。

身延文庫甲本・妙音寺甲本と法輪寺甲本・筆者蔵甲本を比較すると、前者で刷りに不鮮明な部分が見られる。特に送り仮名や返り点の部分において顕著であり、本文にも同様な部分がある。これは、版本が何度も使用されたことによって摩滅し、その結果生じたと考えられる。後者では刷りが鮮明であり、文字の輪郭もはっきりしている。^(補註1)

ところで、甲本の版本には、前章で述べたように題箋の部分があった。この題箋によれば、通し番号1・2を用いた乾・坤の二巻本、同じく3・10による巻第一から巻第八に至る通常の八巻本、同じく12・15による元・享・利・貞の四巻本という、三種類の調巻が行なわれたと考えられる。残る16・17は帙の題箋、11は包紙の題箋であろう。何れの題箋部分も使用されているが、二巻本及び四巻本については刷り本を確認してはいない。⁽¹⁵⁾

2 法華経版本乙本

乙本の版本には刊記等が含まれていないため、刷り本を明確にすることは容易いことではないが、身延文庫に所蔵される一本がその刷り本であると見られる(以下、身延文庫乙本)。身延文庫乙本は、収納箱に明治四十三年十月の銘があり、それ以前の刷り本であることが明らかである。⁽¹⁶⁾ 法量は縦一六・七センチ、横七・五センチ、

折本の法華三部経である。⁽¹⁷⁾ 乾巻・坤巻・開結の三巻に分巻されており、収録本文は次の通りである。乾巻は料紙表に巻一・巻二、同じく裏に巻三・巻四を収める。坤巻では料紙表に巻五・巻六、同じく裏に巻七・巻八を収める。開結は料紙表に無量義経、同じく裏に観普賢経を収める。各巻並びに帙には、子持ち罫で囲われた題箋が付けられているが、表題は次の通りである。

(乾巻) 妙法蓮華経乾巻改正訓点

(坤巻) 妙法蓮華経坤巻改正訓点

(開結) 無量義経 開改正訓点 〈表〉

観普賢経 結改正訓点 〈裏〉

(帙) 妙法蓮華経 改正訓点

坤巻の巻末は、跋文(一折分)および刊記(三折分)となっている。跋文は罫で、また刊記は各折とも子持罫によって囲まれている(写真4)。

(一折) 跋

先師日輝和尚。善用訓読者令学者資義解也。余嚮丁宗祖六百回忌。訂正字画訓点。上之梓。以報涓埃。且従先師之遺志矣。書林北畠氏。憂其猶不便携帶。欲合卷小帙加開結刻之。余大喜更訂正以授之。庶幾乎令諸梵行者。所在繙読無憾焉。明治十九年丙戌五月五日。書於延嶽水鳴樓。

妙法蓮華經卷第八

先師曰輝和尚善用細讀著合學者貴感解也余獨
丁宗朝六百回忌訂正字畫細點上之梓以報涖城
且從先師之道意矣當時凡屬成慶其猶不獲親瞻
欲含卷小法加開臨刻之余大奮更訂正以授之庶
幾乎令諸梵行者明存諸讀悲憫焉明治十九年丙
戌五月五日書於延壽水鳴樓
身延嗣法沙門文嘉日薩

明治十八年四月廿日御届

群馬縣平民

改正訓点人

新居日薩

芝区二本榎町壹丁目十八番地

日蓮宗大檀林藏版

芝区二本榎町壹丁目

製本所

須原屋 鈴木莊太郎
東京市京橋区南伝馬町三丁目五番地

写真 4

身延嗣法沙門文嘉日薩(印)(印)「

(二折) 明治十八年四月廿日御届

群馬縣平民

改正訓点人 新居 日薩

芝区二本榎町壹丁目十八番地」

(三折) 日蓮宗大檀林藏版

芝区二本榎町壹丁目」

(四折) 製本所 須原屋 鈴木莊太郎

東京市京橋区南伝馬町三丁目五番地」

開結の卷末にも刊記がある。各折とも子持野で囲まれているが、角を丸めた意匠をとっていて坤巻のものとは異なっている。

(一折) 日蓮宗大檀林藏版

芝区二本榎町壹丁目」

(二折) 明治廿一年十二月廿日御届

改正訓点者 故新居日薩」

(三折)

発行兼
印刷者

鈴木莊太郎
東京市京橋区南伝馬町三丁目五番地」

甲本は「日蓮宗大教院藏版」であったが、乙本は「日蓮宗大檀林藏版」である。明治十七年十一月、日蓮宗の制度改正により、それまでの大教院は大檀林と改められたことによる。したがって、本経

は日蓮宗大檀林版であるということになる。

日薩の跋文に拠れば、日蓮聖人六百遠忌に字画訓点を訂正した法華經を刊行したが、書林北畠氏が「憂其猶不便攜帶。欲合卷小帙加開結刻之」したので、更にまた訂正を加えた經本を授けたという。

ここでいう日蓮聖人六百遠忌に字画訓点を訂正した法華經とは、明治十三年の日蓮宗大教院版法華經、即ち甲本に他ならないであろう。甲本を通常版とすれば、この度の乙本は携帯の便を考慮した小型版ということになる。また、跋文に記されるように、一部經に開結二經を加えた三部經となっている。「書林北畠氏」が須原屋茂兵衛であることは甲本に照らして明らかで、後述する発売広告によっても明瞭である。

一部經の出版届け出は明治十八年四月二十日付、日薩の跋文は翌十九年五月五日付であるが、開結二經の届け出は二十一年十二月二十日付となっていることから、何等かの事由により開結二經は一部經に遅れて刊行されたと考えられる。改正訓点者である新居日薩の名前に「故」が冠されているが、これは日薩が明治二十一年八月二十九日に死去したことによっている。あるいは、この日薩死去によって、刊行が遅れたものであろうか。

乙本が実際に発売されたのは、明治二十二年二月のことであったと考えられる。『日宗新報』に掲載された発売広告によれば、発売書肆は「須原屋北畠茂兵衛」で、住所は「東京日本橋区通一丁目十

五番地」とある。¹⁸⁾ 身延文庫乙本の刊記では、法華經本体・開結共に製本所あるいは発行兼印刷者として「鈴木莊太郎」とあり、住所も「東京市京橋区南伝馬町三丁目五番地」とあって、発売広告とは異なっていた。この相違は、須原屋の代替わりによって、甲本と同様に乙本の刊記の当該部分が補刻訂正されたことを示すものといえよう。身延文庫乙本刊記の須原屋鈴木莊太郎と住所の部分は、書体・字配共に甲本の改刻した部分と酷似していることから、補刻訂正は同時に行われたと思われる。¹⁹⁾ 上記住所の須原屋茂兵衛は、書籍広告に拠る限り現在のところ明治二十八年八月までは確認される。¹⁹⁾ 同様に上記住所の須原屋書店・鈴木莊太郎を発行者とする書籍は、明治三十八年十月のものを確認することができた。²⁰⁾ したがって、須原屋の代替わりは、明治二十八年八月以降、同三十八年十月までの間のことになる。

ところで、跋文に「加開結」とあることからすれば、乙本にはじめて開結二經が加えられて三部經として刊行されたと考えられる。²¹⁾ したがって、甲本は開結二經を含まない一部經であったといえる。

おわりに

新居日薩が刊行を主導した日蓮宗大教院版法華經について、版木と刷り本をめぐって検討を加えてきた。そこで、改めて本稿で指摘

した点についてまとめてみよう。

誕生寺に所蔵される版本は、甲本・乙本・丙本の三種類あること。甲本は明治十三年に大教院蔵版として刊行されたものであるが、売り捌き所として実際の刊行を担った須原屋の代替わりによって刊記の部分が改刻されている。乙本は、甲本が大型であることから、小型版として企画され、明治二十二年に刊行された。また、甲本が法華経のみの一部経であったことから、開結二経を併せた三部経として刊行されたものであった。誕生寺に所蔵される版本は、この内の法華経本文部分のみであった。刷り本によれば、乙本も後に刊記の部分が改刻されている。丙本は乙本と同様に小型版であるが、一部経ではなく要品であった。⁽²⁾

刊行当初の蔵版者から見た場合、甲本は日蓮宗大教院蔵版であったが、乙本・丙本は日蓮宗大檀林蔵版であるということになる。明治三十七年四月には、日蓮宗大檀林も日蓮宗大学林へと変わり、更に同四十年四月には日蓮宗大学へと移行する。このような中で、蔵版者名はそのまま残り、三種類の法華経は新居日薩が訓点を校訂した経本として広く日蓮宗で用いられるようになったものであろう。なお、本稿では法華経本文の問題について、触れることが出来なかった。また、売り捌き所である須原屋は、近代においても日蓮宗関係の書籍を数多く出版した書肆として、重要な位置を占めているが、この点についても検討が及ばなかった。⁽³⁾ これらの点について

は、後日の課題としたい。

註

(1) 法華経の版経については、兜木正亨『法華版経の研究』(兜木正亨著作集第一巻、一九八二年、大東出版社)を参照。

(2) 浜島典彦「日薩の布教伝道」、新居日薩和上百遠忌顕彰会編『日薩和上百遠忌記念集』(一九八七年、山喜房仏書林) 一三五頁。

(3) 版本の概略については拙著『続 小湊山史の散策』(二〇〇六年、誕生寺)において紹介した。

(4) 版本が誕生寺に納められた経緯については、同寺所蔵の昭和十九年八月十三日付「経版格護之由来」(板に墨書)によって知られる。長文であるが全文を掲げることにする。

(表)

経版格護之由来

大教院版として日蓮宗門唯一の経版である此本版は明治初年東都仏書肆たる須原屋鈴木茂兵衛氏が／大教院より発兌を命ぜられて頒布してゐた。茂兵衛氏歿後も／二代莊太郎氏が引続いて発刊し大教院版の嚴たる權威を以て／本宗経文の最高位を誇示し宗門としても頗る大切な経版で／有ることは噉々するまでもなく尊重すべき宗宝的存在である／此版本が巷間にあること

に格護上憂慮を抱いた識者も相当に／あったが何れも其力及ばず時ならず多年の懸案として未解決／裡に過されてゐた 予て身延、池上、宗務当局に其格護の熱／意なくんば須く宗門寺院に於て嚴に之を格護し以て烟滅を防／ぐべしと密かに考慮を廻らして居られたのが東京都四谷正覺寺住職／加藤孝惇僧正である／版本は大正の大震災火災には被害地京橋区伝馬町にありしが大震／火災数日以前に丸之内架橋下倉庫に移され炎上を免れた／以来式拾余年遂に加藤僧正によつて大東亜戦下悠々其／格護を完了したのである 其奉遷の次第を略記すれば／加藤僧正は 須原屋二代の莊太郎氏は直接の受命者たる／先代茂兵衛氏より繼承したる因由に依り其所有權も明確／にして疑問なきも既に八拾歳を越ゆる老年なれば繼承者により／ては其版權を明確に証明すべき資料無き現狀に鑑み遂に／永遠に宗門に還らざるやも保し難く他方大戰の現勢は／將に空襲必至の声喧々として防空に全力を傾注する戰況／に徴し今断じて為宗護法進んで之が格護に任ずべしと／屢々自ら其交渉に率先挺身せられたる結果鈴木莊太郎／氏及其相続人増雄氏共に加藤僧正の熱誠に感動遂に／父祖相承の大教院版本の奉遷を欣然として同意し／加藤僧正又盛なる礼物を以て酬いられ茲に芽出度く数年来／の素志を貫徹せられたり 依て 昭和十九年二月八日の／吉日を以て奉遷と定められ同日無魔障奉遷せられたのである／其際同

所に計らずも小川泰堂居士編日蓮大士真実伝の／版本を発見し歎喜直ちに之が移管を交渉快諾を得／たるを以て同月十三日其全版を遷し了りたり／日蓮大士真実伝は宗門一般に堀ノ内妙法寺格護と断じ／大本遺文録は須原屋書房に保管しありとなしゐたるものなれど／十数年以前大本遺文録は妙法寺にあることを知り日蓮／大士真実伝は更に身延久遠寺宝藏にあるものと推察し居りたるものなり 今仏天の加護により幸に日蓮宗／門三大版本の整備成ると共に宗門重要な二大版本の全部を／加藤僧正随喜其格護に任せらる為法国幸慶之に過ぎたるはなし／尚茲に蔵する二版の凸版は妙法寺所蔵大本遺文録中腐朽缺版の／補充版にして遺文録は之を加へて完全するもの也／加藤僧正の烈々たる護法の大精神は宗門識者が宿年の願／望たる此の大事を遂に美事解決せられた法勲燦として輝き 高祖／大聖の慈顔莞爾として常に僧正を衛護ましますらむ 今聖／堂の清浄地に嚴なる格護を了するに臨み其由来を記して後世に止む／昭和十九年八月十三日

発願人 加藤孝惇（花押）

嗣子孝仁

經典格護賛助人 平沼騏一郎

立松省三

高見定太郎

成合英二郎

下村清三郎

工事奉仕者

鈴木富吉

瀬川庄三

（裏）

記

一、法華經八卷大教院版全

一、日蓮大士真実伝

小川泰堂居士編
大本五冊

如実院日義（花押）

なお、由来に記される『日蓮大士真実伝』の版本は現在確認されていないが、『高祖遺文録』の金属版二丁分（巻二十の七十七丁及び七十八丁）は所蔵されている。

- （5）日蓮宗における法華經要品及びその版経については、兜木正亨『法華經と日蓮聖人』（兜木正亨著作集第三巻、一九八五年、大東出版社）、松村寿巖『日蓮宗儀礼史の研究』（二〇〇一年、平楽寺書店）に論究されるが、本経については言及されていない。

- （6）「略伝」（薩和上遺稿事蹟編纂会編『新居日薩』一九三七年、日蓮宗宗務院）では、「妙経一部十巻の訓読本発刊（略）之を公刊し、（略）（十三年十月、賛刻岩崎作次郎）」（六八九〜九〇

頁）とある。『日蓮宗事典』（一九八一年、日蓮宗宗務院）の訓読の項では、八巻とする（九八〇頁）。また、影山堯雄編『新編日蓮宗年表』（一九八九年、日蓮宗新聞社）明治十三年九月の項に「改正訓点の法華經一〇巻刊行さる（刊記）」（五〇二頁）とある法華經が大教院版を意味することは、誤りなからう。

- （7）身延町教育委員会編『身延山久遠寺史料調査報告書』（二〇〇四年、身延町教育委員会）所載の「經典総目録」では、「付録 版経目録」7号として掲げる（二四頁）。

- （8）銘文は次の通り。

奉納妙経四十部

聞法院歎喜日到信士
逆修 現安後善
到於院妙岸日歎信女

大正三年六月 高田市寄大工町
上村喜代吉
妻 岸子

- （9）銘文は次の通り。

大正十四年三月六日納之

妓楽山三十三世日麟代

- （10）跋は『新居日薩』九七頁、刊記は同書一一一五頁に収録される。

- （11）『新居日薩』一一一五頁。

- （12）井上宗雄他編『日本古典籍書誌学辞典』（一九九九年、岩波

書店)「売り弘め所」の項(鈴木俊幸執筆)参照。

- (13) 須原屋茂兵衛については、今田洋三氏の詳細な研究(同『江戸の本屋さん 近世文化史の側面』一九七七年、日本放送出版協会)があり、『日本古典籍書誌学辞典』『須原屋茂兵衛』の項も同氏の執筆である。共に参照した。

- (14) 昭和五十四年十一月におこなわれた日蓮宗宗宝調査会の調査による。閲覧は立正大学日蓮教学研究所架蔵の写真帳によった。

- (15) 明治三十八年十月六日須原屋書店より発行された古定賢正『日蓮上人の研究』の巻末に付された書籍広告には、「大教院板」の「^{改正}法華経八卷」八折(折本八冊)及び「法華経両面摺帙入」四折(折本四冊)が掲載されており、四巻本の刊行が確認される。

- (16) 身延文庫乙本は二重の箱に収納されている。銘文は次の通り。

(金蒔絵内箱・底部金泥銘)

大乘妙典三部十卷 智明院日布感得

(桐外箱・底部墨書銘)

明治四十三年十月吉辰

妙経三部拾巻外函

智明院湛誓日布(花押)

- (17) 架蔵番号版経三九、『身延山久遠寺史料調査報告書』所載「版経目録」三九号。なお、三六号の【備考】に示された記事

は、三九号の【備考】のものである。

- (18) 『日宗新報』二三五号(明治二十二年二月二十八日)、同三六号(同年三月三日)掲載。

- (19) 『日宗新報』五七一号(明治二十八年八月八日)。

- (20) 註(15) 前掲の古定賢正『日蓮上人の研究』。

- (21) 乙本について、註(18) 前掲の『日宗新報』掲載広告では、法華経二巻本、開結が付された三巻本の販売が知られる。同じく註(15) 前掲書の広告では、法華経二巻本、開結が付された三巻本、開結のみ一巻の販売が知られる。

- (22) 註(15) 前掲書の広告には「法華経要品改正訓点付 小林上人訓点(再版) 一折」とあり、丙本の刊行が確認される。

- (23) 須原屋は、新居日薩が主導した優陀那院日輝の著作の刊行にあたり製本売捌所となり、また日蓮宗全書などの刊行で知られる。

付記 貴重な資料の調査並びに写真の掲載をご許可いただいた小湊誕生寺、身延山久遠寺身延文庫、台東区妙音寺、さらにご高配をいただいた関係の皆様方に、感謝申し上げます。

- (補註1) 甲本の刷り本については、杉並区中道寺所蔵本を確認することができた。同本巻八の刊記は、法輪寺甲本及び筆者蔵甲本と同一であるが、「大檀林蔵版章」及び「北圃氏千鐘房正本記」の朱印が押印されている。

（補註2）乙本の刷り本については、杉並区中道寺所蔵本を確認することができた。同本は両面摺り折本二冊で、法量は縦一七・九センチ、横七・五センチ。新居日薩の跋文は無く、巻第八の尾題に続いて刊記（三折分）となる。刊記は、本文中に示した身延文庫乙本の二折・三折に相当する部分は同一であるが、四折に相当する部分は次の通りである。

北畠千鐘房

製本所 須原屋茂兵衛

日本橋区通町丁目
十五番地

三折相当部分の「日蓮宗大檀林蔵版」の下に印文「大教院章」の朱印、四折相当部分の「須原屋茂兵衛」の下に「北圃氏千鐘房正本記」の朱印がそれぞれ押印されている。本書によって、乙本も刊記の当該部分が甲本と同様に補刻訂正されたことが明らかとなった。また、明治十九年五月五日付の新居日薩による跋文を欠いていることから、乙本はまず明治十八年に跋文無しで刊行されたことも考えられる。なお、「大教院章」朱印は、法輪寺甲本及び筆者蔵甲本に押印されたものとは異なっている。以上、中道寺副住職山形教亨氏のご教示により、調査することを得た。感謝申し上げます。（再校にあたり記す）